

P13

幼稚園児・保育園児の口呼吸に関する研究

- 奥 猛志、井形紀子、禎久めぐみ、
大内山晶子、弘野美紀、四元みか*、
佐藤秀夫**、深水 篤**、早崎治明**、
山崎要一**

おく小児矯正歯科、よつもと矯正歯科*、
鹿児島大学・院医歯・小児歯科学分野**

【緒言】近年、口がぼかんと開いている、いわゆる口呼吸の子どもたちが増えていると言われている。口呼吸は、口腔機能発達の妨げとなるだけでなく全身疾患との関係等も示唆されている。今回は、幼稚園・保育園児の保護者に対するアンケートから口呼吸の実態を調査するとともに口腔ならびに全身状態との関係についても検討したので報告する。

【対象ならびに方法】対象は、鹿児島市の T キッズ保育園、T 幼稚園に通園する園児 206 名（男児 121 名、女児 85 名）である。平均年齢は 4 歳 6 か月（0～6 歳）であった。園児の保護者に、口呼吸に関するアンケート調査を行った。幼稚園、保育園では、口腔内健診、口唇圧検査（テンションゲージ）を行った。アンケートの「日中よく口を開けていますか」、「口を開けて寝ることがありますか」の 2 項目により口呼吸の可能性を判定し、鼻呼吸群、中間群、口呼吸群の 3 群に分類した。アンケート結果ならびに検査結果について、この 3 群間で比較検討した。なお、統計処理には、 χ^2 検定を用いた。

【結果ならびに考察】アンケート結果による 3 群の頻度は、口呼吸群 46 名（22.3%）、中間群 48 名（23.3%）、鼻呼吸群 112 名（54.4%）であった。口呼吸群は、中間群、鼻呼吸群と比較して、全身的問題、鼻・のど・耳の問題、口・かみ合わせの問題、唇・歯ぐきの問題、食事の問題を抱える頻度が高く、歯科的にも対応を検討する必要が考えられた。

P14

過剰埋伏歯による永久歯胚への影響に関する研究

- 逢坂洋輔、尾崎正雄、橋本 浩、馬場篤子、本川 涉
（福岡歯大・成育小児歯）

【目的】小児歯科の臨床において過剰埋伏歯の症例は多く、永久歯列への影響に苦慮することがある。過剰歯の発生部位は、上顎正中中部が最も多く、永久中切歯の正中離開、転位、捻転についての報告がみられる。しかし、乳歯列期において、過剰埋伏歯が永久歯胚にどのような影響を与えているかを三次元的に調査した報告は少ない。そこで演者らは、デンタル CT を用いて上顎過剰埋伏歯が永久歯胚の位置にどのような影響を与えているかを調査したところ興味有る知見を得たので報告する。

【対象および方法】2004 年 10 月から 2008 年 9 月までに本学小児歯科を受診した Helman の咬合発育段階 II A～II C までの患者で、デンタル CT を撮影された小児 46 名（男子 36 名、女子 10 名）、58 歯を対象とした。撮影されたデンタル CT の矢状断からみた永久歯胚と過剰歯の位置的分類を元に、位置、捻転、歯軸の変位について調査した。

【結果】冠状断および矢状断より観察した過剰埋伏歯は、左側が最も多く 50%、右側 39%、正中 10% で、逆性が 65% であった。全過剰埋伏歯の中で永久歯胚への影響が見られた症例は位置異常 89%、捻転 91%、歯軸の異常 87% であった。

【考察およびまとめ】今回演者らが調査した結果、過剰埋伏歯による永久歯胚への影響はほとんどの症例に認められ、永久歯の萌出に伴ってさらに影響を受ける可能性が示唆された。演者らは、永久歯胚が過剰埋伏歯の影響を受ける前に早期に埋伏過剰歯の摘出を行うべきであると考え。しかし、その一方で、若年者での摘出は避けるべきという報告もあり、摘出においては十分な三次元的な位置確認が必要であると考えられた。